むすびプラス

みんなの組合員活動 Vol.162

ともに育ち 学びあう活動―実践編

委員会をはじめ、年間を通して活動する組合員を"むすび"ます。活動の紹介、情報発信の場をめざします！

50周年記念地域イベント たま東エリアから

2月19日に開催された、たま東エリアのイベントは、「産地とつながろうオンライン交流会 歴史を知って、未来へつなげよう！」と題し、パルシステム東京の50年の歩みを振り返り、3つの産地、メーカーと繋がってオンラインで交流しました。

■築いてきた50年の歩みを知ろう

たま東エリアでは、パルシステム東京の50年の歩みと、生産者・メーカーとの交流の歴史を伝え、今後の活動に繋げていこうと、今回の企画を開催しました。

1970年代、高度経済成長期の物価高騰や公害、有害物質への不安から、安全な食品や生活用品を適正な対価で手に入れたいと、東京の各地に小さな生協が誕生しました。組合員の願いをさらに追求するため、合併や組織統合を重ねパルシステム東京へと成長。小さな生協時代から交流を続けた、米の産直産地のJAささかみ（現JA新潟かがやき）、「私が選ぶ」シリーズのハム・ソーセージの原料産地の山形コープ豚産直協議会、国際産直のモデルケースとなった㈱オルター・トレード・ジャパンと繋がって、交流の歴史を振り返りました。

■長きにわたる交流の歴史を知ろう

JAささかみ（新潟県阿賀野市）とは、40年以上のお付き合い。70年代、国の減反政策に反対する笹神村に、安全な米を作ってほしいと訪問し、交流が始まりました。80年代には10名の生産者が、念願の減農薬、減化学肥料で実験栽培を始め、特別栽培米「新潟こしひかり」の産直が実現。病虫害や災害で大きな被害が出た時には、組合員が積極的な米の購入やカンパなどで支援し、繋がりを深めたことを知りました。

足掛け３年間の集大成が無事終了。ここでしか聞けないリアルな話を伝えられました。協力いただいたすべての皆さんに感謝です！

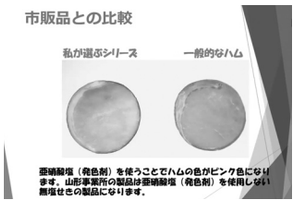
山形コープ豚産直協議会（山形県村山市）は、「子どもに安全なハム・ソーセージを食べさせたい」を実現する産地として交流を始めて30年以上。それが可能だったのは、健康な豚の飼育に取り組む生産者がいたからこそ。そして安全なハムを作りたいという生協の強い信念が、生産者の心を動かしました。育てる人、作る人、食べる人の強い繋がりで今があるとわかりました。

㈱オルター・トレード・ジャパン（新宿区）との交流も30年の歴史が。砂糖の価格暴落でネグロス島の労働者が飢餓に瀕したことをきっかけに、島民の自立支援を開始。バランゴンバナナの栽培に取り組み、組合員はカンパや商品購入で支えてきました。国際産直に関する学習会などを通して、繋がりを深めています

コロナ禍でリアルな交流が難しくても、顔の見える関係を続けていきたいと話す皆さんの言葉に、築いてきた繋がりの大切さが実感できた時間になりました。

交流開始当初は米の供給ができず、餅や柿を供給。その後休耕田で大豆作りを行い「うめてば豆腐」が完成。コアフード米の供給も始まる。田植えや、サマーキャンプなどで交流を続けている（JAささかみ）

豚舎から出る堆肥を地域に還元するなど、資源循環型農業を実践し、豚にストレスをかけない育て方を目指している。不必要な添加物を使わないハム・ソーセージには不可欠な存在だ（山形コープ豚産直協議会）



バナナやコーヒー、エコシュリンプなどを供給。物価上昇で、物流も現場もぎりぎりで頑張っているが、コロナ禍でさらに厳しい経済の中、組合員に利用し続けてもらうにはどうしたらいいか模索している（㈱オルター・トレード・ジャパン）

「たま東エリア委員会紹介＆主な活動場所MAP」
委員会に関心を持ってもらえるよう、当日資料として作成し、イベントの後半で委員会紹介を行った

50周年記念地域イベント 大江戸エリアから

2月26日、大江戸エリアで50周年記念イベントの最後を飾る「たくさんの想い つなげ みらいへ ～支え愛　パルシステム東京今昔50th～」を開催。1970年に誕生した辰巳団地生協から安全・安心で繋がる現在までの歴史や、商品の開発秘話、こんせんくんダンスも登場した企画を紹介します。

■50年の歴史を知ろう

パルシステム東京の原点のひとつ、辰巳団地生協の誕生から50年。地元の大江戸エリアとして、生協誕生から現在までをひも解く動画上映とインタビュー、不可能を可能にした豆腐誕生秘話などを通して、生協への理解を深め次へ繋げていきたいと開催しました。

■こうして生協は誕生した

第一部では、パルシステム東京50年の歴史をつづった自主制作動画「パルジェクトX」を上映。辰巳団地生協立ち上げから、パルシステム東京へと繋がる道筋をたどります。店舗から始まった団地の生協は、内外の利用拡大の求めに応じ、地域の生協へと広がり、共同購入の「班」が生まれます。よりよいくらしをと願う組合員のために、地域の生協同士の競合ではなく協力へ。その間、PB商品の開発や、個人宅配の導入、商品の安全性の確保などがすすむ中で、東京マイコープが誕生。そしてパルシステム東京へ。商品の安全・安心だけでなく、平和や環境、福祉の課題解決などに取り組む姿勢に、生協のよさを実感しました。

続く辰己団地生協の設立者、下山保さんへのインタビュー動画では、パルジェクトXで知った生協の歴史の裏側を聞きました。「団地自治会発足時の最大の問題は物価高だった。くらしを守るために生協が必要だった」「1号店の開店は、幸運に恵まれた」「合併に関して、統合ではなく多様な価値観の共存的連帯、マイナスではなくプラスの発想に転換すべきと訴えて実現した」と語りました。

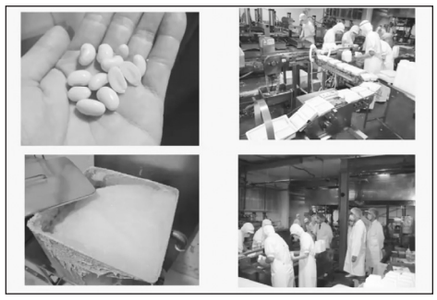
動画制作やインタビューなど、初めてづくしの企画内容でしたが、みんなで支え合って乗り越えました。関わってくれた皆さんありがとう！

■組合員の思いをかなえたい

第二部では、「消泡剤を使わず、にがりで作った豆腐がほしい」に応えた共生食品㈱から、誕生秘話を聞きました。「話が来たとき、どれほど大変かわからなかった。豆腐作りは素人でも、組合員の願いをかなえたかった」「相次ぐ欠品や届けた豆腐が崩れても、クレームがなかった。その陰には、組合員のために不可能に挑戦していることを伝えてくれた職員と、買い支えてくれた組合員がいた」との話に生協の原点を感じました。

その後、委員の投票で選ばれた「PB商品アワード」の発表や、みんなで踊るこんせんくんダンスタイム、生産者カードの紹介などで盛り上がりました。イベントを通して「パルシステム」の意味、「個々の参加が大きな共同を作りだす」ことを体感できました。

パルシステム東京の50年を、実行委員が総力を挙げて制作した、設立当初からの物語を動画に仕立てた


不可能と思われた豆腐作りに果敢に挑戦した共生食品。「もともと無添加の麺を製造していて、無添加にはこだわりがあった。この豆腐作りを可能にしたのは、組合員の理解があったから」と話した（共生食品㈱）

PB商品アワード菓子部門第1位は「カスタードプリン」。製造メーカーから喜びの言葉と画像が届いた。他に冷凍部門は「餃子にしよう！」、調味料部門は「圧搾一番しぼり菜種油」だった

「コロナで大変な目にあった人たちに分配するのが生協の協同としての役割。カンパではなく貧困問題の一助になるように全国の生協で論議してほしい」。「今後は大きな生協のまま、地域ごとに、地域の人たちと一緒に課題を解決するようなしくみがつくれるといい」と語った

画面越しにみんなでこんせんくんダンス！